

独  
り  
舞

## 01

死ぬ。

死ぬこと。

高層オフィスの二十三階で、ガラス張りの壁越しに色鮮かなネオンライトが点滅する街を俯瞰しながら、彼女はこの言葉を何度も玩味した。

良い響きだ。風の囁きよりも優しく、夢の絨毯よりも柔らかい。

死に対して格別強い憧れを抱いていないが、生に対してもそれほど執着は無い。生きていくにはできる限り上手く生きようとするけれど、生の辛さが我慢できる範疇を超えてしまったら、彼女は何の躊躇もなく死を選ぼう。

このような死生観は珍しいものかどうか、彼女には分からない。誰も言わないだけで、案外みな同じように考えているのかもしれない。

4

例えば、今見下ろしているこの街の風景。その中を蟻のように行き交う教え切れない人達に、これから死にゆく人間はどれくらいいるだろうか。あるいは高層ビルから飛び降りて、あるいは鉄道に飛び込んで、あるいは結婚記念日を祝うべくどこかの高級レストランへ急ぐ途中交通事故に遭って。彼女からすれば、生きているということは押しなべて偶然に過ぎないのだ。

「人類が滅亡してくれないかな？」

ふと、昨日うっかり漏らしてしまった言葉を思い出した。日本語を喋る時は偶に言葉を制御できず、口にはしたくないような本心まで漏れることがある。

それは社員食堂で、岡部という二つ上の先輩が滔々と論を広げていた時のことだった。彼は東大卒で、瘦躯長身、眼鏡を掛けている顔はメガネザルを想起させるところがあるが、頭のキレがよく、数字に強いと部署内でも評判だ。日本はGDPの二倍以上の借金をしているとか、これからは歴史的な円安を迎えるから時機を見て早く資産をドル建てにした方が良いか、そういう話題だった。同席の社員は真面目に聞いていたが、彼女は上の

空だった。そんな現実的な話は二十七歳の彼女にとって無関係ではないはずだが、何故か自分事として捉えることができなかった。そこには見えない、けれど決して越えられない壁のようなものがあるように感じられた。十年、二十年後、それは彼女にとって恰も百年千年、遠い未来のように思えた。自分がいなくて当たり前の世界。そんな気がした。

岡部は口早に喋り続けた。国は国民を犠牲にしても自らが滅ぶのを絶対に防ぐものだ。戦時中のことを考えれば良い。負債なんて国民から搾り取るつもりなんだ。日本は国が貧乏なだけで国民は金持ちが多いからね。その時だった。

「それまでに人類が滅亡してくれないかな？」

この言葉を漏らした後にすぐ自らの失態に気付いたが、岡部は彼女をちらっと見て、「そらだね」とさらっと流してくれた。ちょうどその時、昼食の時間が終わった。彼女はホッとした。

幼稚で投げやりな言葉だったけれど、ある意味彼女の本音だった。死は全てを平等へ導き、全ての傷と痛みを癒す。心のどこかで彼女はそう思っていた。

——やはり世間から見ても、こんな考え方は少数派だろう。少なくとも、彼女は同期のように未来を語るができない。

5

一年半前の新入社員研修で、ライフプランニングの講座があった。人生設計。どんな人生を望むか、それを実現するためにどうすれば良いか、という内容だった。病気や事故の可能性（リスク）の話も交えながら脅し半分に、保険（リスクマネジメント）の勧誘も入れてくる。

6

保険。「死」がこの世で最も響きが良い言葉だとすれば、「保険」が最も嫌らしい言葉だろう。未来の不確かさに対する人間の不安に付け込む商売としか思えない。しかも儲かるために本当にそれを必要とする人間を排除するところがどうしても嫌らしく感じられた。

ところが、そう思うのは彼女だけのようだった。右隣に座っていた由佳は、ねえ、どのプランにするの？ と楽しそうに訊いてきた。三十歳までに結婚し、子供が二人欲しい、一軒家のマイホームを買いたいと言う由佳は、研修で配られた資産運用の資料を熱心に読み込んでいて、その明るい笑顔は咲き誇る向日葵を連想させた。しかし未来というものは彼女にとってあまりにも儂く、まるでシャボン玉のようにいつパチッと消えてもおおかしくないように感じられた。シャボン玉は消えていないうちは日光に照らされて七色の光を放ちながら、重力を遡り高く飛ぼうとするけれど、消えた瞬間、何の痕跡も残さないのだ。「保険には入らないよ」彼女はしれっとした表情で答えた。

「えー？ ほんと？」由佳はさも信じられないふりに返答したが、それ以上何も言っ

なかった。

本当は加入したくても加入できなかったのだ。福利厚生の一環としての保険プランは料金が安い分、厳しい加入制限が設けられていた。精神科の通院歴があり、定期的に抗鬱剤を服用している彼女は、加入対象から外れていた。勿論、余計な詮索を防ぐために、それは決して言っ

てはいけないことだった。由佳は次に、彼女の左隣に座っていた絵梨香に訊いた。「絵梨香ちゃんは？ どのプランに入るの？」

絵梨香は恥ずかしそうな笑みを浮かべながら答えた。「多分、入れないと思う。ほら、足のこともあるし……まだ主治医に相談してみないと分からないけど」

「そっか……何かごめん」由佳は気まずそうに謝った。

絵梨香は大学一年生の夏休みに事故に遭い、それ以来片足が悪いという。そんな感情を抱いてはいけないのは分かるけれど、彼女は足を引き摺りながら歩く絵梨香の姿を痛々しく、そして愛おしく思った。それ故にある種の親しみも覚えた。そんなことで親近感を覚える自分に罪悪感を抱きながら、彼女は絵梨香と仲良くしていた。

絵梨香は人前で話すのが苦手だった。同じ部門に配属された絵梨香は自己紹介の時に何度か吃っ

7

「超ノリノリの趙紀恵です。台湾から参りました。でもタピオカミルクティーもパイナップルケーキも大嫌いです」

8

と、笑いを誘いながら堂々と自己紹介を終えた。勿論、レズビアンであることも、「災難」のことも、鬱病のことも、日本には半ば逃亡のような気持ちで渡来したということも、ノリエという日本風の名前は実は自分が付けたものだということも口にはしなかった。

初対面では分からなかったが、時間が経つにつれ、彼女は絵梨香の精神的な強さに気づいた。ある時、社内のエレベーターに同乗する知らないおじさんが無神経に、絵梨香の足を指さして「大変だね」と話しかけてきた。絵梨香はただはにかみ、首を横に振りながら、

「いいえ、私より大変な人も沢山いるし」

と答えた。

たとえその場勢ぎの返事だとしても、何故そんなことを口にするのか、彼女には少し不思議だった。まるで自身の痛みを受け入れているようなその言い方を思い出す度に、受け入れ切れない辛さはどうすればいいのかと、彼女は思ってしまう。乗り越えられない痛みもあるのではないだろうか。傷を乗り越えることができないまま、それを隠し通そうと

するのは不誠実なことだろうか。

夜空を背景に、ガラス張りの壁の中に映っているもう一人の自分に、彼女は囁き声でそう問いかけてみた。虚空に浮かんでいるもう一人の自分も無声で唇を開いては閉じた。ガラスに触れてみると、もう一人の自分も同様に手を伸ばしてきて、彼女と掌を合わせた。ガラスの冷たい感触は掌を通して身体に伝わってきた。夜空に浮かぶ雲はオフィス街の明かりに照らされて、混濁した灰色の煙の塊のように見えた。彼女は軽く溜息を吐いた。するとガラスが曇り、その向こうにいるもう一人の自分の顔を覆ってしまった。

## 02

自分を覆っている巨大な影を最初に感じたのがいつだったのか、その影の根源が何だったのか、いくら記憶の糸を手繰っても答えには辿り着けなかった。

台湾・彰化県の田舎ではあるが、特段に貧困な家庭に生まれたわけでもなければ、家庭内暴力などの問題を抱えていたわけでもない。極普通の核家族で、父はバイクを売る商売をしていて、母は近所の幼稚園の先生をしていた。共働きでそれなりに経済的な自由もあ

9

り、小さい時から彼女に童話や偉人伝などの本を沢山買い与えた。まだ字が沢山読めない低学年の頃から、休憩や放課後の時間を使って、注音符号<sup>[1]</sup>を拾いつつゆっくり読み進めていたことを今でも覚えている。あまり人と話さないから気味悪がられたこともあったようだった。

「迎梅はいつも暗い目をしていて、ちょっと心配です」

担任の先生が両親にそう話しているのを盗み聞きした。迎梅とは彼女のことで、一月に生まれたことから両親が付けた名前だ。

物心が付いた時から、彼女は自分が人と違うのを臆<sup>おそ</sup>げながら悟っていた。お姫様と王子様が結ばれる童話に強い違和感を持ち、逆に自分がドロシーになり綺麗な北の魔女と共に旅をすることを幻想した。この感じ方は明らかに周りと乖離していたのだ。

小学四年生のクラス替えで施丹辰<sup>シタンチン</sup>に出会って、彼女のぼんやりとした違和感は確信に変わった。色白の丹辰はいつも臆<sup>おそ</sup>んだ表情をしていて、喜怒哀楽が全く読めず、動きもどこか危なっかしく感じられ、次の瞬間にでも消えてしまいそうだった。漆黒の双眸だけが幽かに藍色の光沢を帯び、月の映った夜の湖を想起させた。十数年後になっても彼女は時折丹辰を夢見るが、顔のディテールの大部分は既に薄れていても、その双眸は鮮明に浮かんでくる。

初めてその瞳を見た瞬間から、彼女は丹辰に惹かれていたに違いない。恋愛という言葉の最も通俗的な意味すらまだ習得していなかった彼女は、自分の胸裏<sup>うらみ</sup>に蠢<sup>うご</sup>めく感情の漣<sup>なみ</sup>こそ、童話の世界で描かれる姫と王子の間のその類だと直感的に認識した。

彼女はずっとこっそりと丹辰を見ていたが、遂に一度も会話したことが無かった。

一年後の秋、五年生に上がった始業式の日、担任の先生は丹辰の死を告げた。夏休みに母親のバイクの後部座席に乗せられてピアノ教室に通う途中、碎石を載せたダンプカーに撥<sup>は</sup>ねられたそうだ。先生はクラス全員に三分間黙禱するよう指示した。クラスが静寂に包まれる間、彼女は思考を巡らせていた。死んだ丹辰はどこに行ったのだろうか。屍<sup>し</sup>体はまだ残っているのだろうか。安らかな永眠に就いた丹辰の儂く蒼白な顔を、彼女は想像した。

数日後、担任はクラス全員を連れて病院にお線香を上げに行った。霊安室の前の廊下の片隅に、丹辰の白黒の遺影が懸かっていた。打ち沈んだ空気の中で、生徒達は整然と二列に並び、担任が代表してお線香を上げた。彼女は丹辰の遺影を見上げた。柔らかくもどこか物哀しげな笑みを浮かべる丹辰がそこにあり、彼女を見つめ返していた。美しい。彼女は心の底で溜息を漏らした。

「もう一度丹辰に会えたら良いな」

放課後、同級生の女子数人が集まってそんな話をしていた。彼女も会話の輪に加わった。

「そうだね。屍体でも良いから、会いたい」

同級生の睨みつけるような視線から、彼女は自分の失言に気付いた。後で考えれば、それは極めて不謹慎な発言だったが、あの時の彼女は至って真面目だった。死にまつわる言の葉を忌避するほど彼女はまだ成長していなかったし、ダンプカーに撥ねられた屍体がどんな凄まじい様相を呈するかということもまた、想像の及ぶ範疇を超えていた。生きているか死んでいるか関係なく、彼女はただ、丹辰が美しくて仕方なかったのだ。

その日を境目に、丹辰に関する記憶は凍り付き、二度と更新されることが無かった。丹辰の時間は再び流れることが無いだろう。しかし彼女の時間は否応無しに流れ続けた。

夢を見た。それは夢だと彼女は即座に理解した。夢の中で、丹辰は穏やかな、だけど儂げな微笑みを口元に浮かべながら、憂いを帯びた双眸で彼女を射貫くように見つめていた。嗚呼、哀しんでいるのだ。彼女は思った。しかし、誰が？ 彼女には分からなかった。彼女が丹辰の哀しみを感し取ったのか、それとも彼女自身が哀しんでいるのか。ふと丹辰が遠ざかっていくことに気付いた。いや、違う。丹辰が遠ざかっているのではない。

彼女が遠ざかっているのだ。彼女も丹辰も川の中に立っていた。しかし彼女だけが川の奔流に押し流され、丹辰から離れていった。丹辰はただ静かに佇み、狼狽える彼女を見ていただけだった。

強い揺れと轟音で起こされた時、天も地も揺さぶられていた。丹辰の姿は消えた。窓の外はまだ真っ暗で、常夜灯の薄明りだけが周りの闇と拮抗していた。壁に懸かっていた額付き絵画が床に落ちていた。木製の本棚も倒れ、俳人伝や世界文学全集が床に散らばっていた。ガラスの割れた音。遠くで誰かが悲鳴を上げた。隣人の騒音。救急車のサイレン。このまま世界が終わってくれればどんなに良いだろう、と彼女は朦朧とした意識の中で思った。やがて常夜灯も消え、彼女は再び目を閉じた。目元に潤いを感じた。丹辰の顔が再び暗闇に浮かんだ。

再度目を覚ました時、彼女は父におんぶされていた。母は二歳の弟を抱きかかえていた。そこは家の外だった。まだ夜中みたい。薄汚い黄色の街灯を頼りに、人々のシルエットが視認できた。騒めきはいつまでも収まろうとしない。子供の泣き声が聞こえた。男の子。女の子。ラジオのノイズ。彼女は夜空を見上げた。柔らかな光を放つ月が、少し欠けていた。

彼女は思った。嗚呼、もう丹辰には永遠に会えないのだ。

## 03

「小恵はそれで気付いたの？ 自分は女しか好きになれないと」

丹辰のエピソードとあの大地震のことをしよちゃんに話したら、そう訊かれた。

新宿二丁目のリリースというバーで、彼女はしよちゃんと飲んでた。「小恵」は彼女がセクシュアル・マイノリティの世界で使っている中国語のハンドルネームで、日本語のハンドルネームは「リエ」だった。

「女しか好きになれない、ではなく、女が好きな」

と、彼女は訂正した。

しよちゃんは本名が李書柔で、「書」は日本語で「しょ」と読むことから、日本ではしよちゃんと呼ばれている。中国語では小書と呼ばれたりもするが、「おじさん」の意味の「小叔」と発音が似ているから、本人はあまりそれを広めたくないらしい。しよちゃんは彼女と同じ年の台湾人だが、大学を卒業してすぐ来日した彼女と違い、しよちゃんは一旦台湾で就職し、日本に来たのは去年だった。今は日本語学校に通いながら、就職活動

をしている。しよちゃんが来日したての頃に台湾のレズビアン掲示板で立てた「東京にいる圈内人募集！」というスレッドが、二人が知り合ったきっかけだった。

「大して変わらないじゃん」

「違う。『しか』という能動性の欠如した表現を使わないでほしいな」

「細かいな、あんた」

と、しよちゃんは笑いながら言って、金色いびるの入ったグラスを口元に近付け、一口啜った。「日本人っほい」

「『細かい』ではなく『こだわり』と言ってほしいな」

彼女は笑い返した。

くよくよして物事を深く考え過ぎがちな彼女とは違い、しよちゃんはいつものんびりしていて、大雑把な性格の持ち主だ。若干ルーズなところもあり、時にイライラしたり冷や汗をかいたりすることもあるが、一緒にいてとても気が楽だった。

金曜の二丁目はよく賑わら。加えて、九月の終わりは東京の一番気持ち良い季節だ。酷暑が去ったばかりで、夏のような湿っぽさも、冬のような肌を切り刻む寒風も無い。夜十一時、重低音の利いたクラブミュージックがあちこちの店から響いてくる。道路には数組



の同性カップルが肩を並べて歩いており、人気店の外には長蛇の列ができていた。

リスの店内もまたノリの良い音楽が流れており、三十平米にも満たない狭い空間に二、三十人も入っていた。年齢も二十代から四十代までと幅広い。日本人が多いが、中には彼女としょちゃんのように中国語を話す人や、英語を操る白人女性も散見される。一応ウーマンオンリーのレズビアンバーではあるが、男か女か見た目からでは判断がつかない人も沢山いた。一人、大学生と思しきロングストレートの黒髪の女の子が店内のカラオケ機器に歌を入れた。流れていた洋楽が消え、代わりに松たか子が吹き替えした「ありのまままで」の前奏が静かに流れ出した。

「そう言うあんたこそ、なんで日本に来ようと思ったの？」

日本人から何度も訊かれたこの質問を、彼女はしょちゃんにぶつけた。前から訊きたかったのだ。近年LGBTが注目を集め始めたと言っても、日本の「同志砂漠」という悪名は未だに名高い。それに、来日して一年半経つ今でも、しょちゃんはどうも日本に馴染めない様子で、日本人は頭が固いとか、細かいところに無意味にこだわり過ぎたとか、行動が画一的で個性が無いとか、しばしば日本に関する愚痴をこぼしていた。

「あまり深く考えてなくて、友達に誘われたから来ちゃったんだよね」

「んなわけあるか。ちゃんと答えてよ」

しょちゃんは真面目に自分語りをするような性格ではないから、きっと誤魔化してくるだろうという彼女の予測が当たった。やっぱり誤魔化しが効かないか、というニュアンスの溜息を吐いて、しょちゃんは暫く考え込んでから答えた。

「実際に働いてみれば分かるんだけど、台湾ではまるで夢が見えない。見られないんだよ。毎日のようにバイクの群れに混じって仕事に行つて、へとへとになるまで働いて、それでいて辛うじて飢え死にしないくらいの給料をもらつて何とか生活を繋いで……」

しょちゃんはビールを一口啜った。彼女もカルミアミルクのグラスを唇に近付けた。ちょうどその時、女子大生の「ありのまままで」はサビのところまで進んでいた。しょちゃんは話を続けた。

「今でも台北の空を思い浮かべると、決まってあのどんよりとした灰色の曇り空が目につく。ある日の通勤路で、信号を待っている間、ふと空を見上げて、思ったんだ。こんな空を、あと二、三十年も見続けなければならないのか、とね」

そう語るしょちゃんの目には、決して変わらない未来への恐怖と、変化のきっかけは自分で創ろうという積極性が共存しているように見えた。

「ちょうど道端に吉野家があったんでね、それを見て思ったんだ。そうだ、日本に行こうか、と。その時付き合っていた彼女に話したら、勿論大暴れさ。別れたくないと泣きなが

らしがみ付かれた。お金も無いし、日本語もできないでしょ、と考え直すように説得されたりもした。でも駄目だったな。あの島を出ていきたいという願いが心に根差したみたいだ。それで彼女と別れ、仕事を辞め、両親に借金をして出てきた。で、このぎまだ」

18

苦笑しながらしょちゃんはビールを飲み干し、お代わりを頼んだ。彼女もカシスオレンジを注文した。しょちゃんの決意は見方によれば、猪突猛進とも捉えられるが、そこには他者の干渉が介在する余地の無い、しょちゃん自身の自由意志が存在しているように見えた。彼女はそれが羨ましかった。彼女も様々なことを自分で決めてきたが、それは自由意志というより、その都度の成り行きに順応しながら導き出した最適解に過ぎない。言うなれば、得体の知れない何かに手繰られる傀儡のようなものだ。

「ありのまままで」が終わり、店内に拍手が湧き上がった。しょちゃんはりモコンを取り、台湾の音楽ユニット・F. I. R. の曲「刺鳥」を予約した。店内のほとんどの人が日本人なのに、浮くのを恐れず敢えて中国語の曲を入れるのがしょちゃんのすごいところだ。

前奏が流れ出すと、店内の空気が一気に冷めたが、しょちゃんは他人の反応に脇目も振らず、楽しそうに歌い出した。彼女は静かに聞いていた。

茨の鳥の宿命のように

悲劇的でありながら果敢に

命と引き換えに煌びやかな結末を咲かせよう

## 04

九二一大震災は台湾を揺るがすと同時に、彼女の魂の一部を持ち去った。

目を閉じると、丹辰の顔が静かに甦る。夢に沈むと、丹辰の微笑みが幽かに浮かぶ。道端に咲いている白い花を目にした時にさえ、丹辰の甘い香りがする。それは死の香り。亡き者の面影。そらと分かっている、彼女は記憶に懸命に縋り付こうとした。それができるうちは、空はまだ青くいられるし、世界はまだ鮮やかに感じられた。

しかし、東北季節風が強まるにつれ、記憶も次第に薄れていく。丹辰の顔が脳裏に浮かんでも、今やぼんやりとした輪郭にしか見えない。あの憂いを帯びた漆黒の双眸以外、全てが曖昧な色合いの粉塵となり、風が吹くと何処かへと消えていきそうで危なっかしく感じられた。更に日が経つと粉塵も色彩が消え、淡い灰色の煙となり果てた。万物から色が凋落し、空はグレースケールに塗り替えられた。

19

いつからか、彼女は日常茶飯のように泣くようになった。それは読んで字の如く、茶飯の時に何の予兆もなく涙が零れることもあった。宿題と勉強は全く手に付かず、定期テストの成績はクラスのトップから急激に落ちた。初潮が訪れてからは、丹辰が血塗れの死体となり夢に出てきて、悲鳴を上げながら覚めたこともしばしば。留守番の時に、発作的に赤のカラーペンで壁を塗りたいくったり、ボーイスカウト用の白いロープで首を絞めたりすることもあった。彼女の異常行動に気付いた両親は慌てて各方面に助けを求めた。初めは地震のショックで魂魄が抜けたかと思いき、お寺に連れて行って収驚してもらったり、お寺からももらった符水<sup>マシクミ</sup>を飲ませたりしたが、一向に効果が無かったから、今度は西洋医学の力を借りようと、児童精神科に連れて行ってカウンセリングを受けさせた。

20

しかしそのカウンセリングルームでさえ、彼女に霊安室の白を連想させたし、二週間に一回のカウンセリングも彼女にとって苦痛だった。どうせ彼等は分かってくれやしない。彼女も何も言えない。丹辰に恋をした、けれどその丹辰はもういない、そんなことがどうして言えるだろうか。カウンセラーの先生が彼女の心に踏み込もうとし、異常行動の原因を探ろうとしていたが、いつも見当違いの質問をしてくるのが彼女にとっては滑稽だった。両親が提供した「震災の後からこうなった」という証言が先生をミスリードしたのか、先生もまた、地震の恐怖体験が原因だと思ひ込んでいたみたいだ。

誰一人、丹辰に思い当たる人はいなかった。そもそも本気で彼女を心配する人は少なかった。彼女は元々目立たない存在で、授業の合間の休憩時間でもいつも席で本を読んでいて、同級生と一緒に遊ぼうとしないし、登校も下校もいつも一人だった。いじめに遭わなかったのは、いじめの対象にすらならないほど存在感が無かったからではないか、と彼女は時々思っていた。

新世紀に入ってから時間は誰かに早送りコマンドを入れられたかのように、ほとんど何も記憶に残らないまま、二年間があつという間に流れた。彼女は最下位の成績で卒業した。卒業式には出なかったが、それでも君は卒業しなければならないのだとでも言うように、卒業アルバムはちゃんと郵便で家に届いた。七月のある午後、照り付ける烈日の下で蟬時雨が響き渡る中、彼女は退屈<sup>マシクミ</sup>げに卒業アルバムを手を取った。厚いマット紙で百頁超えのアルバムに、彼女のクラスに割かれたのは僅か六頁で、全体集合写真と個人写真を除くと、彼女が写っている写真はたった一枚だった。写真には顔が分かっているも名前が思い出せない人が大半で、とても三年間もいたクラスとは思えない。

ふとある写真に目を引き付けられた。写真には丹辰と他の三人のクラスメイトが写っていた。教室の中で、丹辰はオルガンの椅子に座り、他の三人が丹辰を囲んで立っていた。

21

四人とも彼女を見ている。カメラ目線だからというだけではなく、当時の彼等もまた彼女を見ていた。その写真を撮ったのは彼女だったのだ。

22

それは四年生の音楽の時間だった。丹辰がピアノを弾けるのを知った先生が、一曲演奏してみたら？ とリクエストした。ピアノが無いからオルガンで代用したが、それでも丹辰は見事な腕を見せ、クラス中を（少なくとも彼女を）魅了した。休憩時間に、偶々カメラを持っていた誰かが、記念に一緒に写真を撮りたい、と丹辰に申し出たら、他の二人もそれに乗った形で、四人で写真を撮ることになった。撮影の役目はオルガンに一番近い席に座っていた彼女に押し付けられた。

あの時丹辰が弾いた曲はたしか、モーツァルトの「レクイエム」だった。モーツァルト伝で読んだ記憶がある。「レクイエム」はモーツァルトが世を去る直前に謎の男性に依頼されて創った未完の曲だったことから、実はモーツァルトの死を予見した死神がモーツァルト自身のために創らせた曲ではないか、という伝説も流れていた。

何故丹辰はこの曲を弾くことにしたのだろうか？ ことによると、丹辰もまた、何か不吉な予兆を冥々の裡に感じ取ったのではないだろうか？

写真を見ていると、突如雫が頬を伝って流れ落ちるのを感じた。またか。彼女は心の中で吹きながら、涙を拭い取ろうとした。このどうしようもない病氣——そう思った矢先

に、何かいつもと違う衝動を覚えた。抑え切れない感情の荒波が心の底から湧き上がり、忽ち彼女の精神を乗っ取った。彼女は泣いた。いつもの啜り泣きとは異なる号泣だった。顔をベッドに埋めて、止め処なく溢れ出た涙がシーツを濡らしていくのも構わずに。

「レクイエム」がモーツァルトの自分への冥途の饞だとしたら、丹辰は手向けとして何を持っていったのだろうか。丹辰は事故で即死したと聞いているから、きっとそんな余裕も無かったのだろう。彼女は泣きながら、そんなことを考えた。だとすると、丹辰のために何かを創り、捧げたい。楽器ができないから楽曲は無理。だとしたら、言葉だ。

一時間くらい経ただろうか。ひよっとしたら一時間だったかもしれない。泣き止んだ彼女は立ち上がり、勉強机の前に座り、原稿用紙と鉛筆を取り出した。そして書いた。

丹辰への想いと、丹辰の死について、詩を書いた。

於是有一天我會想起，想起那：．  
 在開始前便已結束的故事  
 未曾碰觸便已失溫的側臉  
 不及掬起便已流乾的血液  
 大河奔向海洋，群鳥回歸山林

そしていつか私は思い出す——  
 始まる前に終わってしまった物語を  
 触れることなく温もりを失ってしまった横顔を  
 掬い上げそびれて涸れてしまった血液を  
 川が海へ駆け、鳥の群れが森へ急ぐように、

23

流光殞墜、餘下一縷鎮魂的琴音——光は流れ墜ち、微かな鎮魂の旋律を残していったことを

24

いつの間にか日が暮れていて、蟬の鳴き声がすっかり収まり、部屋は静けさに包まれた。血の色をした夕陽が窓から射し込み、彼女の影を床に長く長く落とした。漆黒の影。丹辰の瞳と髪も同じ色だった。そうか、生きていくためにはこの色を見つめていなければならないのだ、と彼女は思った。

死について書くことで、彼女は生き延びた。

## 05

もし丹辰に恋をしていなければ、文章を書くことも無かっただろう。文学に縁が無ければ、邱妙津に触れることも無かっただろう。そうすれば、邱妙津の愛読していた村上春樹や太宰治を紹介し、日本語に興味を持つことも無ければ、日本に渡って生活することも無かったかもしれない。そう考えると、今ここにいる自分も偶然の産物でしかないと思えてならなかった。

しかし偶然でも、彼女は曾て邱妙津が一度訪れた東京に来ている。邱妙津の本に出会ったのは中学生の頃だったが、気付いたら彼女が自ら命を閉じた二十六歳という峠をも越えていた。一九九五年のパリで、冷たいナイフを心臓に垂直に突き刺し、血の花を咲かせる直前まで、彼女は東京にいる親友・頼香吟と電話していたそうだ。遺稿の整理と出版を頼んだ後に電話が切れた。電話と共に切れたのは邱妙津の命の糸だった。銀色に輝く蜘蛛の糸が、ポツリと。

息苦しいほどの自己壊滅的な絶望をぶちまけた作品群とは対照的に、人前での邱妙津は常にスターのように振る舞い、周りの人から元気の源だと思われていたらしい。心理学を専攻し、カウンセラーとして活動していたくらいだった。「こんなにも他人に、世界に多くを与えられるのに、少しでも今より苦しまずに生きることすら叶わない自分自身が不憫で仕方が無い」——辞世の作『蒙馬特遺書』で、邱妙津はそう書いた。「遺書」と言っても、本来は辞世の作にするつもりは無かったらしい。頼香吟が邱妙津を死の淵から救い出そうとしたし、邱妙津自身も死について書くことで、生き延びようと努力した。ただ、藻掻いた揚句、その努力があっけなくも失敗したのだ。その結末は偶然なのか必然なのか、誰にも分からない。

25